

トピックス

各教室で年度末表彰

恒例の皆勤者表彰を各教室で行いました。これは平成25年度(平成25年4月から平成26年3月までの)1年間、練習を皆勤した方、あるいはそれに準ずる方を表彰するものですが、各教室の3月の最終練習日に行いました。一年を通じて全回数出席するというのはいへんご立派なことだと思ひまして、私からささやかなグッズをお贈りしているものです。

3月17日には**亀戸スポーツセンター教室**(全40回)で皆勤者5名、準皆勤者2名を、また3月25日には**瑞江鶴の会**(全51回)で同じく皆勤者2名と準皆勤者2名を表彰いたしました。3月28日には、**東大島鶴の会**(全50回)で皆勤者4名を表彰、また会の発足(2007年4月)以来出席が通算200回を超えた方9人にTシャツを会から贈呈しました。29日には**プロバンス会早朝野外太極拳教室**(全48回)で皆勤者1名と準皆勤者2名を表彰いたしました。

閑人閑話

相撲と太極拳

大相撲の大阪場所は鶴竜の初優勝、そして横綱昇進というドラマチックな結果で終わりました。遠藤や大砂嵐のような若手力士の台頭と活躍もあってテレビ観戦にも気合が入りました。

相撲は基本的には巨体同士の力のぶつかり合いですが、必ずしも大きい方が勝つわけではないところがその魅力のひとつです。押すにせよ、投げるにせよ、自分の力任せというのではなく、重心の位置を低くして相手を浮かすとか、体を開いて相手の力のベクトルを変えるとか、太極拳でいえば、相手を“背勢”にする、いわゆる“化勁”と表現される体の使い方が随所に入っています。

これはどんな格闘技でも同じで、相手の攻撃をまともに食らって命がいくつあっても足りないの、必然的に、躲したり、いなしたり、(技を)殺したり、弾いたり、の守り技は必須なのです。

ボクシングで言えば、「ウィービング」「ダッキング」「ブロッキング」「パーリング」「スエーバック」などがそうですし、空手では、流派によっていろいろ表現は違うようですが、「上げ受け」「外受け」「内受け」「下段段払い」、あるいは「捌き」などがあります。要は言葉と用法がそれぞれ違うだけのことです。

相撲に話を戻せば、もちろん、洞察力、反射神経、スピード、立ち合いや技をかけるタイミング、そして腕力や体重などなどの複雑な要素がそれぞれに交錯する中での攻防ですから、そこがまたたいへん魅力的なところなのです。

しかし最近では力士の大型化、重量化の影響もあって、寄り切り、押し出し、寄り倒し、あるいは叩き込み、肩透かし、突き落としなどが増え、勝負が単調になってきているとの批判もよく聞かれます。言われてみれば、うっちゃりも少なくなりましたし、蹴返し、渡し込み、ちょんがけなどの足への手技・足技もほとんど見ることはできないのはちょっとさびしい思いです。

しかし、個性的な、あるいは異国出身の力士たちが、次から次へと真向からぶつかり合う大相撲のテレビ観戦は私には欠かせない楽しみです。相撲の中に太極拳の技を探すという邪道な楽しみもありますし、また次の5月場所が待たれるところです。

きこうべん 左顧右盼

(82)【第16話 楊名時師家の名語録をひもとく】

第12話 自他共栄

(2002年3月 「太極」第133号)

『……私は、ふだんの稽古のとき、自分の健康・幸せを願うだけではなく、一緒に稽古する仲間の健康・幸せを祈りながら稽古しましょう、と申し上げている。みんなの健康・幸せを祈りながら稽古すると広々とした、おおらかな心になり、終わったあと、とても気持ちよくなる。心も豊かになり、体ものびやかに

なる。みんなの健康・幸せを願い、祈っていると、自分の健康・幸せにもつながるのだと信じている。

「自他共栄」である。

心を豊かに持つこと自体が健康法だが、太極拳のお仲間からの気もいただき、よい友だちと、なごやかに、楽しく稽古すると、元気に行きわたるといえるのは、うれしいことだ。

人間も、自分が自分がと肩肘を張っていると、人間関係もスムーズにいかなくなるし、顔も柔和でなくなる。「自他共栄」の精神がたいせつである。

「自他共栄」とは、文字どおり、自分も他人様も共に栄える、ということ。自分だけ良ければいい、と言うのではない。

……もともと「自他共栄」という言葉は、「精力善用」「柔能克剛」とともに、講道館柔道を創られた嘉納治五郎先生の柔道の理念の一つである。

私は昭和23年に京都大学を卒業したのち、上京。水道橋にあった講道館で3年ほど柔道を学んだことがあった。……ので、いっそう「自他共栄」は味わい深い言葉だと思い、のちに、楊名時太極拳の「指導者十訓」の中に取り入れた。……』

この「自他共栄」については、はからずも3月20日(木)の本部道場中野教室において中野完二先生からも、この「自他共栄」が楊名時先生のたいへん強い信条であったというお話がありました。

私も、まさに楊名時先生の思想と信念が如実に表れていると思ひまして、『左顧右眄 第16話 楊名時師家の名語録をひもとく』の連載の最後に掲載させていただきました。

昨年の5月第105号から連載してきました『左顧右眄 第16話 楊名時師家の名語録をひもとく』はこれで終了させていただきますが、原本である『楊名時著・〈太極〉巻頭文集』(中野完二編)【上の写真は同書の表紙】のまえがきで楊名時先生が自ら述べられておられる結語をご紹介します。

『……本書には、楊名時太極拳の歴史、歩みが如実に示されている。それに、「健康・友好・平和(和平)」という、私の八十年の生涯に賭けた想い、願い、夢が色濃く出ているのではなからうか。……楊名時太極拳の「心」をこの文集からくみ取っていただきたい。そして、その「心」を今に活かし、未来につないでいていただきたい、と心より願っている。』

さらに、同じそのまえがきの中で楊名時先生は『〈太極〉の巻頭に毎号発表した私の文章も、私が話した内容を、中野完二師範が読みやすくまとめてくれ、補ってくれた賜物である。私と中野師範の共同作業と言ってよい。……』とおっしゃられていることも皆さんにご紹介いたします。

楊名時師家がなくなられてはや9年の年月が流れました。現在教室に参加されている方のなかにも先生を存じ上げない方々も増えてまいりましたので、この『雲の手通信』で、師家のお言葉を紹介させていただいた次第です。【「左顧右眄」はしばらくお休みして、また秋ごろから新テーマで連載する予定です。】

旅をうたい拳を詠む 妖しの春

幼子をネットの闇に預けたる

親の心のその闇深し

子を二人ネットで預けてその母は

生きるがための風俗勤めと

弥生なる望月赫く上がり来て清濁正邪の巷照らせり

【写真右；3月15日夜、我が家のベランダから撮影、カメラは NIKON COOLPIX P520 】

